
オレンジの夕日

蹴球少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレンジの夕日

【Nコード】

N7271G

【作者名】

蹴球少年

【あらすじ】

ブランコとすべり台のある公園で、ぼくは女の子に会った。僕は女の子に惹かれ、いつの間にか好きになっていた。心地よい時間が、ぼくを幸せにしていた。

ぼくがあの人に会ったのは、ブランコと滑り台がある公園でだった。

ぼくは公園に独りでいた。

友達はいなかった。

何人かの子が鬼ごっこをしていた。

ぼくはそれを見ていた。

うらやましいとか、そんなことを思ったことはない。

そりゃ友達がほしいと思ったことがないわけじゃないけど、それは無理なんだと言いついて聞かせてきた。

子供たちがあまりいないブランコの周りをうろつろつしてみる。

イスに飛び乗って、軽く揺らす。

『キイキイ』と心地よい音がした。

なんとなく眠たくなってちよつとまぶたを閉じた。

やがて目が覚めたとき、あたりはオレンジ色でいっぱいになっていた。

そつと周りを見渡す。

ぼくはギョツとした

目の前に女の子がいた。

「君、ずっと独りでいたよね？」

見た感じよりもずっと大人っぽい声。

「私と遊ばない？他の友達みんな帰っちゃって」

女の子がぼくに話しかけている。

その女の子は、ぼくがずっと遠くから見ていた女の子。

穏やかな雰囲気で、ぼくはなんでだか彼女に惹かれていた。

近付くことはないとわかっていたけど、どうしても惹かれるところがあった。

そんな女の子が、ぼくに話しかけている。

相手を間違えてるんじゃないかと思った。

でも、その目はまっすぐにぼくを見ていた。

「君もまだ帰らないんでしょ？ だったら大丈夫だよね」

ぼくはオドオドしていたけど、やっぱり嬉しかった。

女の子は笑ってブランコの上に立った。

そして2人でブランコを揺らしていた。

女の子の笑った顔を見て、幸せを感じた。

その日を境に、女の子はよくぼくのところにくるようになった。

ほとんどは遊ぶ友達が帰っちゃったからだったけど、ぼくはそれで満足だった。

辺りがオレンジに染まる、夕焼けの、幸せな時間。

それを待っていつもブランコを揺らしていた。

今日も女の子が近付いてきた。

いつもの笑顔。

友達に向けているときと変わらない、でも今はぼくだけに向けられている。

「君といると、本当に楽しい気分になれる。なんだか不思議な感じ」
そんなセリフが、ぼくをもっと幸せにした。

帰り際に見せるちょっと切なげな瞳も、少しのさびしい気持ちと一緒にくすぐったくて心地よかった。

何日も過ぎて、ぼくはどんどん女の子を好きになっていった。

気付いたときには、その想いがどうしようもないくらい大きくなっていた。

そんなある日、いつものようにブランコを揺らしていたら、女の子が暗い顔をしてぼくのところに歩いてきた。

まだいつもより早い時間。

「あのね、私、もうすぐ遠くに行かなくちゃダメなの。お引越しするんだって。だから、今日はお別れを言いに來たの」

ぼくは驚いた。

そして、ショックで固まった。

規則的に揺れていたブランコがゆっくりと止まったのに気付かなかった。

女の子がいなくなる？

今までのぼくの日常がひっくり返る、そのことに今は耐えられそうになかった。

女の子が話しかけてくる前までなら、友達がいなのが当たり前だったときならなんてことなかった。

でも、今は違う。

ぼくは女の子が好きで、離れるなんて考えられない。

「だから、今日でお別れだね。私がいなくなったら、ちゃんと友達見つけなきゃダメだよ?」

そんなことできない。

ぼくの友達はお女の子しかありえない。

「えっ?」

ぼくはたまらなくなつて女の子のひざに飛び乗った。

「………もう、仕方ないなあ」

女の子は優しく笑つてぼくの頭を撫でた。

心地よくて、いつまでもそのままでいたくて、ぼくはそつと目を閉じた。

やがて目が覚めたとき、あたりはオレンジ色でいっぱいになっていた。

きよろきよろと周りを見回す。

誰もいない公園。

女の子も、他の子供たちも、誰もいない。

ぼく独り。

まだ頭に残っている心地よさ。

女の子を思い出してみる。

切なくて胸がキュツと苦しくなった。

女の子を探しに行こうか？

いや、それじゃあ女の子がせつかくお別れを言いにくてくれた意味がなくなる。

ぼくは、このブランコで女の子がもう一度やってくるのを待ってなきゃダメだ。

女の子のことが好きだったから、ぼくは待つてなきゃダメだ。

もう一度優しく頭を撫でてくれるときを、この気持ちを伝えられる日を。

だから、今はまだ聞こえなくても、言ってみよう。

本当に好きだった気持ちを。

もう一度会いたいから。

「にゃー」

うんと気持ちを込めた一声。

ぼくはブランコに飛び乗って、そっと目を閉じた。

目を開いたときに、オレンジ色でいっぱいの公園に女の子がいますように。

せめて、夢の中でも会えますように……。

オレンジ色でいっぱいになった頃、僕は目を覚ました。

（後書き）

閲覧ありがとうございます

ほのぼのとした話を書いてみたくなって書いてみました。

ちよつとでも穏やかな気持ちになっていただければなと思います。
よろしければ感想のほうもいただけたら嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271g/>

オレンジの夕日

2010年12月2日15時23分発行